
3月15日・エピローグ

(森安章人、清水一利・編、SOS! 500人を救え! 3・11 石巻市立病院の5日間、東京、三一書房、2013、p.185-213)

2015年1月16日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

4. 3月15日・エピローグ

2011年3月11日に東日本大震災が起きた。岩手県石巻市は地震や津波で大きな被害を受けた。

津波で流されたり建物の下敷きになるなどして多くの人々が亡くなる一方で、助かった人々はライフラインが途絶えた被災地からの脱出を図っていた。病院ではまず入院患者の搬送を行わなければならない、石巻市立病院では患者を搬送し終え病院スタッフが避難を開始し始めるまでに5日かかった。その間、大きな余震や照明のない夜や絶飲絶食など過酷な状況が続いたし、家族の安否も分からない中で患者の脱出に尽くしていたので、医療者側も非常に苦しい精神状態だった。その場の全員が被災者という立場にある中で、知恵を出し合って診療・看護を行い、最後まで自己より他者を思う意識を持ち続けたのは、医療者としての職業意識だ。また一般避難者からは、自己を表に出さず極力明るくふるまう、食料・水を分け合う、自分のできることには積極的に参加する、といった自己犠牲がみられ、統率を守る国民性が垣間見られた。

被災後の石巻市は瓦礫と化しており、道もわからない状態だった。四方を瓦礫に囲まれたモノトーンな風景なので、徒歩で移動していると方向が分からなくなり元の場所へ戻ってってしまうほどだった。移動中に家の材木の間から人の前腕を見ると、普段から人の死は見慣れているし、ついさっきまで死亡確認を行っていた医師たちでさえ、人が死ぬという事実、元気に生きていた次の瞬間に死ななければならないという事実、改めて畏怖の念を感じた。医師というのは、単に病気との闘いの中で死を迎えることには慣れているというだけの特殊な職種でしかなかった。誰しもが自然の脅威の前ではなすすべない存在である。

被災者の避難、被災地での医療や食料の支給などにDMATが非常に活躍した。阪神淡路大震災を教訓に結成されたチームではあるが、東日本大震災の被害規模はDMATの想定をはるかに超えるものだった。しかし、この災害でDMATは本来の活動の枠を超えた仕事までこなし、石巻市立病院では500人の人間が無事に避難できた。東日本大震災での活躍により、DMATが改めて注目されるようになった。災害時、治療に難渋するのはけがをした人ばかりではない。高齢者社会の中では、外傷者の搬送に加え、普段から病院に通っている内因性疾患の人や入院患者の搬送も視野に入れる必要がある。地震国日本では今後も新たな災害が起こる恐れは少なくないので、有事に備えたDMATの役割は今後ますます重要となる。